

突然 冬将軍がやってきました。今年は雪が多いと噂されていましたが、ここ10年程は年末まで雪が降らないことに慣れていたので、信じてはいませんが、見事に裏切られてしまいました。このぶんでは、根雪になりそうです。

今年の秋の紅葉も美しく、実りの秋をもう少し長く満喫したいと思っていましたが、あつという間に落ち葉の絨毯が消えて、一夜のうちに真っ白いそれになりました。冬に本格的に突入。室内では薪ストーブが全開になり、外では毎日焚き火が煙をあげています。落ち葉を集めての焼き芋や暇さえあれば林檎を焼いたりが大人気。先日の餅つきも、薪ストーブで大豆を煎り、挽き臼できな粉を作り、三升の餅米があつという間に終わりました。

忘れてならないのは、フィッシュ&チップス給食。子どもたちの口から「今回は豪華すぎる」という言葉が口々に出たほど。石窯パン スープ ポテトチップス そして巨大な二度揚げした白身魚のビールで溶いた衣による本格的なフィッシュ（イリアリブランドを旅した人達に、本場よりもうまい！！と言わしめた）こちらも全て 自然エネルギー（薪と竈と石窯だけ）で調理。

更に 先日の新そば給食。子どもたちの収穫したサツマイモを竈で天ぷらにして、青山さん家の栽培した玄蕎麦の実を製粉したばかりの粉3キロを手打ちにして、そして 今回は、京都料亭御用達のだしを赤木さんからいただき、前日から利尻産の昆布で水出しして、当日の早朝から、生活クラブの薄口醤油とみりんのみで、かけ汁を作りました。さすが 料亭 蕎麦屋の天ぷら蕎麦、子どもたちもよくわかります。皆 かけ汁まですすり終えていました。3キロの粉（蕎麦にしたら 4, 5キロ）でも足りない位の蕎麦給食でした。

これほどの給食を、野外で自然エネルギーだけで作る施設は、大地以外にはあり得ないだろうと自負していますが（まだまだ上を目指そう！！）、衛生管理 殺菌 を無視して、灰や煙やスガまみれしている給食 マスクや手袋や白衣を着ていない調理人 そう言えば調理師免許もなく栄養計算もしていない 配膳も 子どもたちがしている、食べるのは 外のテーブルや地面の上。それでも、味や雰囲気そしてお客は超一流！！ そんな大地の給食です。



【ラッパ話株式会社】

お話 「番ねずみのヤカちゃん」で歌って見ましょう！！

も～しも、あなたが暮らしの中で～、ぶつぶつ呟くお父さんを見つけたら～、すぐに怪しんではいけないよ～♪
よくよく調べてみるんだよ～、もしもそのお父さんが、おはなしの練習をしていたら～、それはラッパ話株式会社のお父さんよ～♪ お父さんたちが、おはなし会にいたら～、どうぞだいじにしてあげてね～♪ ドドさんやドドさんのおくさんがしたように～♪

「壮観ですね…！」

あるお父さんは、おはなしをするために椅子に座ったとき、会場を見渡して思わず言った。前方には、何人かの子どもたちが地べたに座っていたものの、会場を埋め尽くすのは椅子に腰掛けている大勢のマダムたち。一番後ろにいた私も「これは凄い…」と思っていたが、聞き手を前にした話し手から見える光景は、いかほどだったのだろう。

逆の立場、つまり私が、その道のプロを含んだ大勢の紳士たちの前で何かを披露することを想像したら、それだけで緊張した。少なくともこの数十年は、ほとんど女性が占めていただろう、おはなしの世界。その世界に、（おそらく日本初）お父さんだけのおはなし会が足を踏み入れる瞬間を今、私は目撃しているのか…！と密かに感動していた。

冒頭、「おもちゃのチャチャチャ」をして場をあたためていた、「やかましい」？！お父さんたち。おはなしを1つ、2つと聞いていくなかで、マダムたちの印象はどう変化したのだろうか。

「も～しも、ふわふわの毛のはえた～、大きな動物に出会ったら～、すぐに近づいては、いけないよ～♪」
藤松さんが『番ねずみのヤカちゃん』で歌う場面で、身体を左右に揺らして自然とリズムにのるマダムたちの後ろ姿があった。おはなしに入り込んでしまうあの感覚を私も感じていた。

これまで「おはなしの世界にお父さんたちは入ってこないで」とは、きっと誰も言っていないし、思ってもいない。しかし、開拓者たる”ヤカ父さん”たちが、どんな風におはなしをしてくれるのか？ということとは、気になっていたにちがいない。でも今回のおはなし会を通して、ポストカードを手放した私のように、こう思ったのではないか。

「これからは、おはなしという宝物を、お父さんたちとも共有していきたい」と。

（東京子ども図書館ラッパ話株式会社公開お話し会参加者の感想より）

12月15日（日）早朝6時前に、寒い寒いと言いながら、暗闇の中、薪ストーブの燃えるののはな文庫の中に、次々と父親達が飛び込んで来た。文庫のベランダ越しに見える志賀高原の山並みがうっすら輝きだしてきた。定例の勉強会の日であるが、会場は、文庫内 文庫ベランダ 大地ミニの部屋 青ちゃん家2階 東屋など、その都度違うが、今回は、文庫から正面に陽が昇る季節で一番美しい夜明けを期待して、文庫を選択した。

熱い紅茶を飲みながら、昨日のおはなし籠のおはなし会、一昨日の蕎麦給食、そして、東京子ども図書館のおはなし会の話など、四方山話をしながら、ガラス越しに、明るくなっていく志賀高原の山並みを見つめていた。

今日の勉強会は、新しく覚えたお話を持ち寄り話すという事ではなく、皆、何となく集まってきているようだが、大事なお休みの早朝から、こんな時間に集まってくるというエネルギーは、何かあるといつも感じる。案の定 赤木さんから宮澤賢治の序を話し出した。そして、藤松さんが 度十公園林を語り出した。そして 星野道夫のエッセイも語られ、次第に話が盛り上がっていった。

7時過ぎに、期待に答えて、素晴らしい太陽が顔を出してくれた！！ この光景を見ると 「クナウとひばり」を思い出す と誰かがつぶやいた。昨年の3月に、秋山さんが 志賀の山並みを背景に、クナウとひばりを、この時間帯に語っていたとき、ドンピシャで、クライマックスに陽が昇った瞬間を思い出した。お話しに、魂をもたらし、祝福した瞬間であった。鳥肌が立ったのと同時に 涙が溢れてきたのを覚えている。

涙と言えは 細川律子さんの宮澤賢治の 永訣の朝 度十公園林 を聞いた時 初めて お話で涙した。そして それ以来、お話で何度も涙したことがあるが、男性のお話で涙したことはなかった。

が、赤木さんの マッチ売りの少女 を初めて聴いたときは 男性の語りで初めて涙した。そして 10月の練馬おはなしの会の最後のマッチ売りの少女でも、不覚にも 会場の迷惑になるほどすすり泣いてしまった。もちろん、お話の語りにもよるが、目の前の聴衆の世界に入り込んでる表情を見ているだけで、同じ世界を旅している事に、感動を更に高めてしまったという感じであった。

加えて 東京子ども図書館公開お話し会。冒頭の参加者の感想にあるように、目の前には 子どもはもちろん、お話歴の長い先輩 強者 東京子ども図書館のスタッフなど、蒼々たる観客が並んでいる。が、もともとラッパ話株式会社は我が子のために話すのが原点。一部では 皆 目の前の子どもたちだけを見て話して楽しんだ。2部は いよいよ大人だけになった。三枚のお札 正直な若者とネコ クナウとひばり わたしのおふねマギ-B パタポン詩 ゴハおじさん 貧しい島の奇跡 会場の雰囲気 観客の表情 仕草 などが 明らかに高揚していくのが 鳥肌が立つほど感じられた。皆 同じ世界を旅していると！！

もちろん 今回も不覚にも 貧しい島の奇跡 ですすり泣きを漏らしてしまった。この話の感動とともに、素晴らしいラッパ話株式会社のメンバーの素晴らしいさに。

この日の東京子ども図書館の会場に立ったメンバーの後ろには、それぞれ志賀高原の朝日の後光が輝いていた